

ぐんま名月 100%を使ったシードルが、市のふるさと納税の返礼品として人気です。深緑色のボトルには、県の郷土かるた「上毛かるた」の読み札「鶴舞う形の群馬県」の鶴、群馬の「G」、ぐんま名月をモチーフにした月をデザイン。重厚さがある見た目とは反対に、リンゴの食感と果糖を生かした甘さを持ち、ジュースのような飲み口から、アルコールが苦手な人にも飲みやすくなっています。

松井さんが園の代表になり約10年。栽培に励む傍ら、育てたリンゴでお酒を造りたいと考えていました。7年前に同郷の藤井達郎さんが営むバーを訪れたことが、シードルづくりの始まりでした。醸造所「Fukiware Cidreerie」の完成により、栽培から醸造まで市内で行い、原料提供を松井さん、製造を藤井さんが担当し、二人三脚で商品化しています。



県リンゴ品評会で評価され、笑みを浮かべる松井さんと父・富雄さん

沼田産シードル ふるさと納税でPR



松井りんご園 下発知町一
代表 松井恵一郎さん

県リンゴ品評会では、最高賞の県知事賞を7年連続受賞。有機肥料で土壌改良し、外観や糖度、品質が評価され、今年も連覇を狙います。「栽培技術を磨いて産地のブランド力を高め、生食もシードルも沼田産としての魅力を発信したい」と意気込みます。

2018年には、リンゴの食味を競う「第6回りんご王者決定戦（青森県弘前市）」で、初出場初優勝を果たしています。

新たなスタイルで挑戦

リンゴの魅力を国内外へ

さまざまな技術や加工を駆使し、沼田のリンゴが全国や海外へと広まりつつあります。地元産リンゴ100%を使ったシードルづくりに励む藤井達郎さん。ふるさと納税返礼品としてシードルを提供する松井恵一郎さん。販路拡大に挑戦し、東南アジアへリンゴを輸出する小野圭介さんの取り組みを紹介します。



藤井達郎さん
—利根町平川出身—

古里に醸造所 シードルで恩返しを

プレス機で搾ったリンゴ果汁を醸造タンクに移し、温度管理に気を配りながらゆっくりと発酵を進め、熟成まで約2カ月。「ようやく夢が叶った」。豊かな香りと濃厚な甘みが口の中に広がるシードルが完成しました。

今年3月、リンゴを原料にした発泡酒・シードルを生産する県内初の醸造所を利根町に開設しました。開いたのは東京・神田でシードルとウイスキーの店「エクリプス ファースト」を経営する藤井達郎さん。観光名所の吹割の滝にちなんで「Fukiware Cidreerie」と名付けました。

藤井さんは元プロボクサーで、引退後にバーテンダーに転じました。シードルとの出会いは、26歳でスコットランドを訪れたとき。爽やかで多彩な味わいに惹かれました。

15年に店を開業。シードルの魅力を伝え続け店が軌道に乗ってきた一方、地元産リンゴの消費の落ち込みや後継者不足が気掛かりでした。「沼田のリンゴでシードルを作り、古里に恩返しをしたい」と思いが募り、醸造所の建設を決意。2019年に経営のノウハウを学ぶ「ぬまた起業塾」に入塾し、夢を具体化していきました。

醸造所の完成に合わせ、バーの常連客や地元リンゴ農家と「初仕込み」。原料のリンゴはぐんま名月やふじなどで、初回は2日間で1600本を仕



込みました。ぐんま名月のシードルは、産地以外にほとんど出回っていない希少さに目を付け、看板商品にしています。今秋は、10、11月につがるやおぜの紅、12月中旬にぐんま名月、1月にふじなど旬のリンゴを使い、本格的にシードルづくりに力を入れます。外国産特有の複雑な味わいを持つシードルにも挑戦したいといい、本市のふるさと納税返礼品の登録も目指しています。

バーを経営する東京と沼田を行き来する生活。店でも藤井さんのシードルが好評で「リンゴ農家とのつながりを大切にして、沼田産のシードルを多くの人に届けたい」と意気込みます。

リンゴの販路を拡大しようと、シンガポールやタイなどへ輸出する小野圭介さん。「おいしいものは海外でも伝わる」と魅力を発信し、世界で通用するリンゴを目指しています。

ぐんま名月やおぜの紅など県産品種を中心に、毎シーズン約300キログラムを出荷。鮮度を保持するスマートフレッシユ処理をすることで収穫時の状態で味わえ「甘くておいしい」と、現地の百貨店などで販売されています。

品種や沼田の概要を説明した英語表記のパンフレットを入れたり、商品のラベルには外国人受けするゴールド色を使ったりと、工夫も凝らしています。

日本の果樹は海外でも需要が高く、沼田のリンゴは新たなビジネスの販売ルートを展開できる可能性があるとして輸出に挑戦。市の海外販路開拓支援などを活用して、2018年2月にシンガポールを訪れました。店頭に並ぶリンゴの味を確かめ、現地の担当者と販売方法を模索しました。



シンガポールの百貨店に小野さんのリンゴがずらりと並ぶ

同年秋に輸出を開始し、今年で4年目。売れ行きは好調で、輸出を始める地域の仲間も増えてきています。今年は霜の影響で例年より出荷量は少ないようですが「継続がリンゴを根付かせ、豊作の年にたくさん投入できる」と力を込めます。地域産業の発展に向けて、販路を拡大する小野さんの手腕に注目です。

リンゴ販路拡大 東南アジアで人気



輸出用に作った英語表記のラベル

峠の小野りんご園 一佐山町一
代表 小野圭介さん